

主日礼拝 2020年11月1日(日)

題 「忍耐と慰めの源なる神」

テキスト：ローマの信徒への手紙15章：1～13節

(聖書の箇所は最後にあります。)

今日の箇所は、パウロの書いたローマの信徒への手紙の事実上の終わりの部分であるとも言われています。いよいよパウロは教会員同志の関係で大切なことをあふれ出る思いで語っているように思えます。

小見出しにありますように「自分ではなく隣人を喜ばせる」ようにとのこと。

隣人を喜ばせることを自分の喜びとするようにということでしょう。

こんなに難しいことが一体どうすればできるのでしょうか。

思いついたのは、「まずは相手に合わせてみることから始まるのかな」ということでした。しかし、これもかなり忍耐のいることだと思います。なぜなら私を含め多くの方は、自分の思いや考えを聞いてほしく語りたいのですから。

1:わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。

2:おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。

心が律法から解放され、信仰によって自由にされた信仰者、つまりわたしたち信仰において強い者は強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありませんというのです。自分の欲望の満足を第一としないという生き方です。それは、すでにイエス・キリストの行われたことです。

3:キリストも御自分の満足はお求めになりませんでした。「あなたをそしる者のそしりが、わたしにふりかかった」と書いてあるとおり

です。「あなたをそしる者のそしりが、わたしにふりかかった」この言葉は、理解するのが難しく思いますが、詩編69編10節のことばの引用です。

神をそしる、神にそむく者のそしりが、わたしに、つまりイエスキリストに降りかかったということではないかと理解します。それは主イエスの十字架の苦しみ、死によって実現したのです。ご存じのようにイエスさまは十字架を負う責任はなかったのですが、人々を罪の支配から解放し、自由とするために苦しみ十字架につけられ死に贖いを遂げられたのです。それは私たちを生かすためでもあったのです。イスラエルの指導者モーセを思います。彼は、死が近づいた時、神が約束されたカナンの地を山の上から見ることはゆるされましたが、その地に入ることはできませんでした。それは、イスラエルの人々の罪のゆえであるとされています。つまりモーセはイスラエルの人々の罪の責任を自ら担わされたのです。しかしモーセは自分の人生を振り返って「これで、よ

し。」とっていたと思います。モーセは神の恵みを十分に感じていたと思うのです。わたしたちにもきっと、主イエスにあってそのような日が来るのだと思います。モーセは来るべき救い主であるメシアキリストの先駆け、モデルとされるのです。

旧約聖書は神の救いの約束を語り、新約聖書は、救い主イエスキリストの到来を証言してくれています。キリストがこの世に来られたのは、実に敵対する者たちの侮辱を受けて苦しむためであったと言われます。

それによって、それによってのみ、神さまのこの世に対する救済計画は実現したのです。

4:かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教え導くためのものです。それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができるのです。」とあります。

聖書に記された神、イスラエルの神、天と地をお創りになった神は、やがて世界を完成させてくださる神は、「忍耐と慰めの神」なのです。希望とは、罪と死からの解放、全き自由と平安を与えられる希望です。

パウロは、心から願い祈っています。

5:忍耐と慰めの源である神が、あなたがたに、キリスト・イエスに倣って互いに同じ思いを抱かせ、

ここの「互いに同じ思いを抱かせ、」とは、主イエスにあって仲よくすることだと思えます。

すると信仰者の群れには次のようなことが起こって行くのです。。

6:心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方をたたえさせていただきますように。

これは神の力である聖霊、御霊の働きです。

そして、神さまからの良き知らせ福音は、

「福音はユダヤ人と異邦人のためにある」と語られます。

主イエスはイスラエル人だけではなく、すべての人々のためにこの世に来てくださったのです。主イエス・キリストの前には、人種も民族の違いも、国家の違いも宗教の違いさえないのです。

ですから

ですからパウロは「7:だから、神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい。」と心をこめてローマの信徒の人々に語ることができたのです。

わたくしごとで恐縮ですが、20歳のころ大阪に住んでいた頃、初めて教会に行きました。礼拝の最中で、「しずけきかわの岸辺に」の賛美歌が歌われており、初めて聞く賛美歌に心がほっとする思いになり、深く慰められました。その思いが今もあります。

「自分はここにいて良いのだと。ここにいたい。」と。

初めて来たわたしを教会の人たちは、自然にあたたかく受け入れてくださいました。これがわたしの教会体験の原点でした。教会に集う喜びのスタートでした。その後、様々な教会に通うようになり、「これが、教会か。と思う時もありましたが、この最初に出会った教会のあたたかい体験が教会とはどういう場所なのかを教えてくださいたいように思えます。教会は傷ついた心がほっとできるところなのです。

教会は福音のシャワーをたっぷりと味わえるところなのです。

その場を確保するために、苦勞を背負っておられるイエスさまと信仰者たちがいることを教えられるのです。信仰者たちは、苦勞を通してイエスさまの恵みに与っているのです。教会の歩みを通して神さまの栄光が表れて行くことを信じるのです。

神とイエス・キリスト、そして神の教会が受け入れてくださったのですから、わたしたちも互いに寛容な心で受け入れ合う歩みを続けたいと願います。

ただ今から主の聖餐に与るわたしたち、この聖餐に於いてキリストは共にしてくださいっていること、共に受け入れ合うことが起こっているということを覚えたいと思います。

◆自分ではなく隣人を喜ばせる

- 1:わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。
- 2:おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。
- 3:キリストも御自分の満足はお求めになりませんでした。「あなたをそしる者のそしりが、わたしにふりかかった」と書いてあるとおりです。
- 4:かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教え導くためのものです。それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができますのです。
- 5:忍耐と慰めの源である神が、あなたがたに、キリスト・イエスに倣って互いに同じ思いを抱かせ、
- 6:心を合わせ声をそろえて、わたしたちの主イエス・キリストの神であり、父である方をたたえさせていただきますように。

◆福音はユダヤ人と異邦人のためにある

- 7:だから、神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい。
- 8:わたしは言う。キリストは神の真実を現すために、割礼ある者たちに仕える者となられたのです。それは、先祖たちに対する約束を確証されるためであり、
- 9:異邦人が神をその憐れみのゆえにたたえるようになるためです。
「そのため、わたしは異邦人の中であなたがたをたたえ、／あなたの名をほめ歌おう」と書いてあるとおりです。
- 10:また、／「異邦人よ、主の民と共に喜べ」と言われ、
- 11:更に、／「すべての異邦人よ、主をたたえよ。すべての民は主を賛美せよ」と言われています。
- 12:また、イザヤはこう言っています。「エッサイの根から芽が現れ、／異邦人を治めるために立ち上がる。異邦人は彼に望みをかける。」
- 13:希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなたがたを満たし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださるように。